

Title	芥川龍之介『白』論 : 不条理な変身をめぐって
Author(s)	西村, 真由美
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 98-109
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70987
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

芥川龍之介『白』 一論

不条理な変身をめぐって-

〈童話〉 の語り手の枠を越えて

を発表した。『白』は八作のうち最後に位置する童話となる。 日」に『仙人』、大正十二年一月に「良婦の友」に『三つの宝. 『アグニの神』の四作品を著し、そして大正十一年、「サンデー毎 の後大正十年までの間に同雑誌に『犬と笛』『魔術』『杜子春』 正 た童話である。芥川は完成作として八作の童話を残している。 一七年、「赤い鳥」に 芥川龍之介『白』 は、 『蜘蛛の糸』を発表したのを皮切りに、 大正十二年八月「女性改造」に発表され そ 大

遭遇し、 指 芥川の小説に見られるものとは異質の「明るさ」や「健全さ」を 行を重ねた後、 を象徴するかのような「黒色」の犬に変身してしまうが、 **!摘する論は少なくない。** お隣の飼い犬である黒が犬殺しに捕えられようとしている場に 恐怖に怯えて逃げ帰った白は、友を見殺しにした己の罪 作品の最後に「白色」の姿に戻る。この物語に、 尾崎瑞恵氏は「「白」は積極的に行動 白は善

> 西 村 真 由 美

じきった楽天的な気分が感じられる」としている。 は全くなくて、文章全体に一種のはりがあり、 も「「蜘蛛の糸」や「杜子春」に見られたような、ものうい感じ 希望と夢を与えようとさえしている」と述べた。また、鳥越信氏② なかったような積極的な生き方を示し、子供たちの将来に明るい 脱却できるかを示したものである」とし、「小説では全く見られ た物の見方にささえられて」おり、「エゴイズムからどうすれば することによって、 昔の平和な生活に戻る点でさらに一歩を進め 徹頭徹尾明るく信

も多い。越智良二氏は、 また、 先に挙げた尾崎氏と同様、 次のように述べる 白のエゴイズムに着目した論

「「蜘蛛の糸」では盲目的なエゴイズム衝動が描 の開眼が、そして、「白」ではエゴイズム克服の行動が描っ では其れを自覚した自己反省が、更に「杜子春」では人間性 ていた。」 かれ、

この作品が 〈我が身の助かりたさにお隣の黒を見殺しにした罰と

n

話〉という因果応報譚ととらえられやすいことには、この作品のして黒犬へと変身させられた白が、善行を積んで元の白色に戻る

箱を引つくり返し、

振り向きもせずに逃げ続けました。」

〈語り〉

の特徴も関わっていよう。

- かれさうになりました!」・「御覧なさい。坂を駆け下りるのを! そら、自動車に轢
- つた、大きい黒塗りの自動車です。」・「あの自動車をごらんなさい。え、、あの公園の外にとま

「御覧なさい、坊ちゃんの威張つてゐるのを!」

語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。

性を示すことを目指す。

石ころを蹴散らし、往来止めの縄を擦り抜け、五味ためのか、足を止めるけしきもありません。ぬかるみを飛び越え、い黒の鳴き声が聞えました。しかし、白は引き返すどころ・「その途端に罠が飛んだのでせう。続けさまにけた、まし

文を詳細に分析することにより、この作品にさらなる読解の可能 大なは強調され、着目されやすい。このような語りの特徴は、 ではあろう。しかし、〈語りの枠〉にとらわれず作品を 的なものではあろう。しかし、〈語りの枠〉にとらわれず作品を 的なものではあろう。しかし、〈語りの枠〉にとらわれず作品を がした時、さらなる読解が可能となるのではないか。『白』一 がした時、さらなる読解が可能となるのではないか。『白』一 の発表誌である「女性改造」の特色と同誌と芥川の関係に でいて考察しているように、『白』の特徴は、 ではないか。『白』一 の発表誌である「女性改造」の特色と同誌と芥川の関係に でいて考察しているように、『白』の特色と同誌と芥川の関係に でいて考察しているように、『白』の特色と同誌と芥川の関係に でいて考察しているように、『白』の特色と同誌と芥川の関係に でいて考察しているように、『白』の特色と同誌と芥川の関係に でいて考察しているように、『白』の特色と同誌と芥川の関係に でいて考察しているように、『白』の特色と同誌と芥川の関係に でいて考察しているように、『白』の特色と同誌と芥川の関係に でいて考察しているように、『白』の特色と同誌と芥川の関係に では、『白』の本語り、黒は白に見捨てられた「可 を詳細に分析することにより、この作品にさらなる読解の可能

二、三様のエゴイズム―― 白・子どもたち・黒 ――

可哀さうな黒を残した儘、一目散に逃げ出しました。」 で
立ました。が、その拍子に犬殺しはじろりと白へ目をやりました。「教へて見ろ!
貴様から先へ罠へかけるぞ。」――
した。「教へて見ろ!
貴様から先へ罠へかけるぞ。」――
した。「教へて見る!
貴様から先へ罠へかけるぞ。」――
した。「教へて見る!
貴様から先へ民へかけるぞ。」――
と叫ばうとし

ません。」 ・「白はもう命の助かりたさに夢中になってゐるのかも知れ

西井英行(5) 「この時の白は、『蜘蛛の糸』の犍陀多の「自分でいたという点で、一種のエゴイズムといえることは間違いなたが、「自分さえ助かればよい」という気持ちが多少なりとも働一目散に逃げた。それは結果として黒を見殺しにすることとなったが、「自分さえ助かればよい」という気持ちが多少なりたさに、にまれていたという点で、一種のエゴイズムといえることは間違いないでいたという点で、一種のエゴイズムといえることは間違いないでいたという点で、一種のエゴイズムといえることは間違いないでは、「無軽にあり、「自分でいた」のでは、「無軽にあり、「無軽にあり、」の機能多の「自分でいたという点で、一種のエゴイズムといえることは関連にあり、「無軽にあり、」の機能多の「自分でいた」というには、「無軽にあり、」の機能多の「自分でいた」というには、「無軽にあり、」の機能のでは、「無軽にあり、」というには、「無軽にあり、」の機能の外に、「無軽にあり、」の機能のでは、「無軽にあり、」の機能をあることは関連にあります。

また、自は黒くなった自分を殊更に嫌悪しており、「一つにはまた、自は黒くなった自分を殊更に嫌悪しており、「一つにはったという表現には、変身したことへのに言い難い、自らの白い容姿への優越感が色濃く作品中に見てとは言い難い、自らの白い容姿への優越感が色濃く作品中に見てとは言い難い、自らの白い容姿への優越感が色濃く作品中に見てとは言い難い、自は黒くなった自分を殊更に嫌悪しており、「一つにはまた、白は黒くなった自分を殊更に嫌悪しており、「一つにはまた、白は黒くなった自分を殊更に嫌悪しており、「一つにはまた、白は黒くなった自分を発更に嫌悪しており、「一つにはまた、白は黒くなった自分を発更に嫌悪しており、「一つにはまた、白は黒くなった自分を発更に嫌悪しており、「一つにはまた、白は黒くなった自分を発更に嫌悪しており、「一つにはまた、白ば、

も目を向けた時、見えてくるものがあるのではないか。他にの悲鳴を背後に聞きつつ白は命からがら逃げたのである。の悲鳴を背後に聞きつつ白は命からがら逃げたのである。の悲鳴を背後に聞きつつ白は命からがら逃げたのである。というエゴイズムと、自己愛の心理は通底していの悲鳴を背後に聞きつつ白は命からがら逃げたのである。自分だい。

聞いた「坊ちゃん」は、白を痛めつけて追いやってしまう。あをした芝の上」で「ボオル投げ」をして遊ぶ「小さい主人」をあをした芝の上」で「ボオル投げ」をして遊ぶ「小さい主人」をあをした芝の上」で「ボオル投げ」をして遊ぶ「小さい主人」をあまず着目したいのは、「お嬢さん」と「坊ちゃん」である。「青まず着目したいのは、「お嬢さん」と「坊ちゃん」である。「青

でもか?」

「竜生! まだ愚図々々してゐるな。これでもか? これがふと、力一ぱい白へ投げつけました。
があるのです。坊ちゃんも、――坊ちゃんは小徑の砂利をおふと、力一ぱい白へ投げつけました。

砂利は続けさまに飛んで来ました。中には白の耳のつけ根

ている。自分だけ助かろうとしたということを白のエゴイズムと自分に関係のある範囲だけは事なきを得たい、という意識は流れの飼ひ犬の黒なのです」という語りの根底にも、他はいざ知らず、といって追いやる「小さなご主人」は、〈我が家の愛犬〉で犬」といって追いやる「小さなご主人」は、〈我が家の愛犬〉で犬」といって追いやる「小さなご主人」は、〈我が家の愛犬〉で大」といって追いやる「小さなご主人」は、〈我が家の愛犬〉で大」といって追いやる「小さなご主人」は、〈我が家の愛犬〉で大」といって追いからあります。」

さらにいえば、それは物語の中で「可哀さうな黒」と被害者とするならば、エゴイズムを持つのは決して白だけではない。

して語られる黒も例外ではない。

あん。助けてくれえ!」・「きやあん。きやあん。きやあん。きやあん。

自の中で「虻のやうに唸って」いた黒の「助けてくれえ!」といら叫び声は、特定の誰かに対して向けられたものではないが、恐が危険を冒すことになったとしても自分だけは助かりたい――とが危険を冒すことになったとしても自分だけは助かりたい――という感情が含まれたこの叫びには、黒がもつエゴイズムを読み取れる。我が身の守りたさゆえの白の逃走と、命助かりたさに誰かれる。我が身の守りたさゆえの白の逃走と、命助かりたさに誰かれる。我が身の守りたさゆえの白の逃走と、命助かりたさに誰かれる。我が身の守りたさゆえの白の逃走と、命助かりたさに誰かれる。我が身の守りたさゆれる。

れする。
れする。
との記述には、人間社会のエゴイズムや身勝手さが見え隠い。これはたびたびの人命救助などの白の功績を報じるものであい。これはたびたびの人命救助などの白の功績を報じるものであまた、〈改心〉 した白の活躍ぶりを示す新聞記事も看過できなまた、〈改心〉 した白の活躍ぶりを示す新聞記事も看過できな

ろ、右の狼は十字町に現れ、一匹の黒犬と噛み合ひを始めを行ひ、全町に亘る警戒線を布いた。すると午後四時半ご後、箱根方面へ逸走した。小田原署はその為に非常勤動員後、箱根方面へ逸走した。小田原署はその為に非常勤動員宮城巡回動物園のシベリア産大狼は二十五日(十月)午後宮城巡回動物園のシベリア産大狼は二十五日(十月)午後宮城巡回動物園のシベリア産大狼は二十五日(十月)午後宮城巡回動物園のシベリア産大狼は二十五日(十月)午後

小田原署長を相手どつた告訴を起すといきまいてゐる。」あると云う。なほ、宮城動物園主は狼の銃殺を不当とし、の狼はルプス、ヂガンテイクスと称し、最も兇猛な種属で其処へ警戒中の巡査も駆けつけ、直ちに狼を銃殺した。こた。黒犬は悪戦頗る努め、遂に敵を噛み伏せるに至った。

「最も兇猛な種属」の「大狼」を「頑丈な檻」にいれて眺めるこ

嬢さん」「坊ちゃん」をはじめ、黒にいたるまで、共通するもの嬢ではない。人間の大人たちは勿論、清純そのものに見える「お物語は白を中心に展開する上、語りの効果も影響して、白の工が語は白を中心に展開する上、語りの効果も影響して、白のエボイズムが描かれる。また、町中に狼を逃がしてとれる。
 とが「人気を集め」、さらにそれが逃げれば殺すという人間のエとが「人気を集め」、さらにそれが逃げれば殺すという人間のエとが「人気を集め」、さらにそれが逃げれば殺すという人間のエとが「人気を集め」、さらにそれが逃げれば殺すという人間のエとが「人気を集め」、さらにそれが逃げれば殺すという人間のエとが「坊ちゃん」をはじめ、黒にいたるまで、共通するもの様でおいている。

三、白への罰という不条理――〈正義〉の不確かさ――

として描かれているのである。

はその黒さを見ては「臆病」を恥じ、「臆病」にならないように白は黒くなったのは黒を見殺しにしたためだと思っている。白いと思つてゐます。」 かと思つてゐます。」 わたしの体のまつ黒になつたのも、大かたそのせい ・「お月さま! お月さま! わたしは黒君を見殺しにしま

自分を奮い立たせて善行を積んだ。これは自らのエゴイズムの自

されてはいない。白自身も「大かたそのせいかと思つてゐ」るとこの作品の中では、白が黒くなった理由も、白く戻る理由も明示た白が数々の善行を積み、それが報われた結果だったのだろうか。そして、最後に白い自分に戻るのは、自らの行いを恥じた白が数々の善行を積み、それが報われた結果だったのだろうか。の上で、愛するご主人のもとに戻ったとき、白は白い犬に戻った。の上で、愛するご主人のもとに戻ったとき、白は白い犬に戻った。の上で、愛するご主人のもとに戻ったと問題という。そして最後に死をも覚悟

いないことである。帰っってきたときには、白は自分が悪いことをしたとは全く思っては言うが、注目したいのは、犬殺しに遭遇して、白が家に逃げ

ろも不可解である。

あるように、その原因は定かではなく謎のままであ

お月さまに向

かって「わたしは黒君を見殺しにしました」と白

が、お隣の黒君は掴まりましたぜ。」
恐ろしいやつですよ。坊ちゃん!「わたしは助かりました・「お嬢さん!」あなたは犬殺しを御存知ですか?」それは

しかし、それはあくまでも後付けのものにすぎず、それしか思いた白は、その理由は黒を見殺しにしたせいだろうと考えているがに遭遇した恐怖でしかない。その後、黒く変身した自分に気付いに遭遇した恐怖でしかない。その後、黒く変身した自分に気付いに遭遇した恐怖でしかない。その後、黒く変身した自分に気付いた白は、そいう意識はなかった。犬殺しの視線に我が身の危険悪いのはあくまでも犬殺しであって、白にはもともと〈黒を見殺悪いのはあくまでも犬殺しであって、白にはもともと〈黒を見殺悪いのはあくまでも犬殺しであって、白にはもともと〈黒を見殺悪いのはあくまでも犬殺してあった。

ででまで善行を積んだ白がずっと黒犬のままであったというとこが、そもそも、白はそんなに罰を受けねばならないほど悪いこればならなかったのか。また、木村小夜氏も「白が黒くならなければならなかったのか。また、木村小夜氏も「白が黒くならなければならなかったのか。また、木村小夜氏も「白が黒くならなければならなかったのか。また、木村小夜氏も「白が黒くならなけたに確認した通りである。そうであれば、なぜ白は黒くならなければならなかったのか。また、木村小夜氏も「白が黒くならなけたに確認したが、しかしそれは白だけに限ったのものではないことはたいうエゴイズムが黒犬への変身の理由なのであれば、身を捨ったというエゴイズムが黒犬への変身の理由なのであれば、身を捨ったというよる。と指摘するように、そのように解釈しているだけである。当たる節がないがゆえに、そのように解釈しているだけである。

正立に黒自身の不覚のためであることは間違いない。 まった黒自身の不覚のためであることは間違いない。 なったのであり、そもそもが、黒が犬殺しに殺されたのは別に白だったのであり、そもそもが、黒が犬殺しに殺されたのは別にはだした」「白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありませだした」「白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありませだったのであり、そもそもが、黒が犬殺しに殺されたのは別に白に責任であるわけではなく、犬殺しの投げたパンに飛びついてした。 は、黒のその後は変なった黒自身の不覚のためであることは間違いない。

し」という存在も、広い意味でいえば人間の自己防衛のために生かれている。黒を殺し「それは恐ろしいやつ」とされる「犬殺また、自己防衛のため犯す〈罪〉が、この作品中では他にも描

自己防衛のために殺しを行っているという大義名分を持っている 表向きとしてはこの犬殺しもまた、広い意味で言えば人間たちの 大丈夫だという「私」に対し、近所の子どもが「札が附いていて されたのではないかという場面で、ポチには札がついているから がある。二葉亭四迷の『平凡』で、飼っていたポチが犬殺しに殺 いものとして描かれるが、この「犬殺し」の犬を殺すという られるように、「犬殺し」という存在は時に怖れられ、時に卑し 間のために有効に使う手段が「犬殺し」であると述べる一節が見 た二葉亭四迷『平凡』にも犬を襲う恐ろしいものとして「犬殺 年に発表された巌谷小波の『こがね丸』や明治四十年に発表され では、四万一千百十一頭の野犬が掃蕩されたという。明治二十四 五年八月一日から七日にかけておこなわれた「狂犬病予防週間 されるなど取り締まりが強化されたことを指摘している。 病予防週間」が盛んに設けられ、野犬掃蕩に関する補助金が給付 犬殺しについて言及し、「白」が執筆された大正末期には 狂犬病の流行は人々を悩ませてきた。今川勲氏は、 み出されたものの一つと言えるだろう。明治から戦後に至るまで、 〈罪〉には狂犬病の予防、犬の危害の防止するという一応の理由 捕獲・打殺が本来の目的のものであったかは疑わしいものの、 の中でも、 殺されますから」と言うことが描かれているように、すべて が登場し、また大正十三年に発表された松永延造『職工と微 犬殺しという仕事について、人間の「残忍」を世 狂犬病対策と 大正十 . 「狂犬

姿を見た「お嬢さん」「坊ちゃん」の会話も見逃せない。としていることを考えると、黒くなってしまった白が吠え続けるまた、犬殺しが狂犬病予防のための野犬取り締まりを大義名分

だわよ。」

・「「あら、どうしませう? 春夫さん。この犬はきつと狂犬

バットも頭の上へ飛んで来ます。」「肩をぽかりとバットに打たれました。と思ふと二度目のを出しました。しかし坊ちゃんは勇敢です。白は忽ち左のお嬢さんは其処に立ちすくんだなり、今にも泣きさうな声

い。しかし、彼らは物語最後まで平穏に暮らし続ける。ある日突い。しかし、彼らは物語最後まで平穏に暮らし続ける。ある日突れ、「お嬢さん」と「坊ちゃん」が自己防衛のために逃げた白が〈罪〉とされるなら、自己防衛のために実は不大でも何でもない犬の頭にバットを振り下ろす子どもたちの行れたのはやむをえないものであり、作品中で描かれる犬殺しのために逃げた白が〈罪〉とされるなら、自己防衛のためにバットでん、「お嬢さん」と「坊ちゃん」が自己防衛のためにバットである。しかし、彼らは物語最後まで平穏に暮らし続ける。ある日突さん」「坊ちゃん」にもしかるべき制裁があってもおから人々を「狂犬」だとバットで白を打つ子どもたちと、狂犬病から人々を「狂犬」だとバットで白を打つ子どもたちと、狂犬病から人々を

場面に注目する。助けを求めるナポレオンの声に、白は黒の叫びまた、「ナポレオン」という仔犬をこどもたちがいじめている

然黒犬に変身させられることなどはない。

白は声のする方へと駆けつける。そこでは子どもたちが仔犬をひ声を重ね合わせて身震いするものの、同じ過ちを繰り返すまいと

きずり騒いでいた。

せん。唯笑つたり、怒鳴つたり、或は又仔犬の腹を靴で蹴た。しかし子供たちはそんな声に耳を貸すけしきもありまいともがきもがき、「助けてくれえ」と繰り返してゐましいともがきもがき、「助けてくれえ」と繰り返してゐましはりへ縄をつけた茶色の仔犬を引きずりながら、何かわはりへ縄をつけた茶色の仔犬を引きずりながら、何かわ

ナポレオンは縄をつけられた仔犬であり、子どもたちに何か危害つたりするばかりです。」

いてみる。

われた白が「坊ちゃん」から受けた暴力に比べれば、このナポレを与える気配もない。犬殺しから黒が受けた暴力や、狂犬と間違

願望をいだくに至るほどの〈罰〉を受けることはない。い目にあうという程度の〈罰〉は受けるものの、家を追われ自殺為は最も深い〈罪〉である。しかし、彼らは白に追いやられて怖衛のためではない純粋ないじめである点で、この子どもたちの行ちゃん」の場合とは違い、このナポレオンへの暴力だけは自己防オンへの暴力は程度の軽いものではある。しかし犬殺しや「坊

かと思えてくる。黒が殺されたのは白のせいではないのに、そした〉ということ自体が、そもそも思い込みに過ぎないのではないたった〉というとらえ方には無理があり、〈罪のために黒くなっこのように見ていくと、〈悪いことをしたために白には罰が当

てではなく、不条理さを内包した物語として、この作品を読み解たではなく、不条理を自自身が、自身のエゴイズムへの〈罰〉かったか。その不条理を白自身が、自身のエゴイズムへの〈罰〉かったか。その不条理を白自身が、自身のエゴイズムへの〈罰〉がったけが黒犬へ変身させられるという憂き目にあってしまった。て自分こそが助かりたいと願ったのは白だけではないのに、なぜて自分こそが助かりたいと願ったのは白だけではないのに、なぜ

凡』のポチと同じく、黒は歴とした飼い犬であり、野犬ではない。まう〉という事件である。先ほどにも挙げた、二葉亭四迷『平の出来事の発端ともいえる、〈黒が犬殺しに狙われて殺されてしまうことと同様、理不尽なことがもう一つある。それは、すべて特別悪いことをしたわけではないのに白が黒犬に変えられてし

その〈正義〉は非常に不確かなものといえる。てか知らずか、本来は殺す必要のない飼い犬の黒を殺している。のために野犬を取り締まるという〈正義〉をかざしながら、知っの思は殺された。それは甚だ理不尽なことである。犬殺しは社会それなのに、「野犬の取り締まり」という正義のために、飼い犬

という勇敢な正義感からバットで犬を打ったが、その〈正義〉のえる姉の声を聞いた「坊ちゃん」は、その危険から姉を守らねばの突然の出来事に狂ったように吠えたとき、狂犬ではないかと怯また、あの犬殺しに遭遇した日、黒くなってしまった白が、そ

実は無関係な何かを傷つけるだけで終わった。がった。何かを守ろうとし、〈正義〉として信じたその行いは、ための行動もまた、実は知らずに愛犬を殴るという事態へと繋

ましい一匹の黒犬」として生き、その姿を「いろいろの新聞」がまた〈正義〉といえば、黒犬となった白は度々人命を救う「勇

伝えたとある。しかし、話はそこで終わりはしない。

死もわたしの顔を見ると、何處かへ逃げ去つてしまふのでが、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪はれません。は火の中へ飛び込んだり、或いは又狼と戦つたりしました。 はないのがいやさに、――この黒いわたしを殺したさに、或いいのがいやさに、――この黒いわたしを殺したさに、或いいのがいやさに、――この黒いわたしを殺したさに、或いいのがいかがいる。

あるということが、見え隠れする。前や、世間の評価というものが非常にあやふやで不確かなもので前や、世間の評価というものが非常にあやふやで不確かなもので願望ゆえであったことが明かされる。ここには〈正義〉という建神の使いのような「義犬」と称えたが、実はそれらの行為は自殺世間は、たびたび人命救助をする黒犬を「勇敢」で「けなげ」な世間は、たびたび人命救助をする黒犬を「勇敢」で「けなげ」な

「きやあん。きやあん。臆病ものになるな! きやあん。この声は又白の耳にはかう云ふ言葉にも聞えるのです。あん。助けてくれえ!」

臆病ものになるな!」」

の克服といったこととは違ったところにあるものだったのではなら、そして、自が自己としまた、エゴイズム白が、いくら善行に励んでも白くなることはなく、戦って死ぬこらが、いくら善行に励んでも白くなることはなく、戦って死ぬこらを望んでもかなわないことからは、この白の思っている「臆病ものになるな!」という〈正義〉もまた、非常に不確かなものでものになるな!」という〈正義〉もまた、非常に不確かなものである。能病さや見殺しにしたこととは全く異ある可能性がうかがえる。臆病さや見殺しにしたこととは全く異なるところに、きわめて不条理なものとして黒犬への変身というなるところに、きわめて不条理なものとして黒犬への変身というではないではあり、そして、白が白犬へと戻ることもまた、エゴイズムとはあり、そして、白が白犬へと戻ることもまた、エゴイズムの克服といったこととは違ったところにあるものだったのではなったの方は、

四、「白」へと戻るということ――「わたし」ばかりの白――

か。

さんや坊ちゃんに会はして下さい。」 う一度此處へ帰つて来ました。どうか夜の明け次第、お嬢何も願ふことはありません。その為に今夜ははるばるとも「お月様! お月様! わたしは御主人の顔を見る外に、

なぜ主人の庭へと戻ったこの日、元の白犬に戻るのか。これは、しさ故に死を望んでも、それすら叶えられなかった。それなのに、るのか。命を顧みず戦ってもずっと白は黒いままであったし、苦朝、白は突然元の白犬へと戻った。ここで、なぜ白は白犬へと戻お月様に語りかけ、そしてもとのご主人の庭へと戻ってきた翌

そして白とエゴイズムの関係についても新たに捉えなおすべきとをりて白とエゴイズムの関係についても新たに捉えなおすべきとを身させられなければいけなかったか〉という疑問と同等に、と変身させられなければいけなかったか〉という疑問と同等に、と変身させられなければいけなかったか〉という疑問と同等に、と変身させられなければいけなかったか〉という疑問と同等に、と変身させられなければいけなかったか〉という疑問と同等に、と変身させられなければいけなかったか〉という疑問と同等に、と変身させられなければいけなかったか〉という疑問と同等に、と変身させられなければいけなかったか〉という疑問と同等に、と変身させられなければいけなかったか〉という疑問と同等に、と変身させられなければいけなかったか〉という疑問と同等に、と変身させられなければいけなかったか〉という選問というにあるのではないからいるというには、これではないったか〉という疑問というによっている。

でに注目したい。 いた最初の時点では、「臆病」を恥じることに起因していなかっいた最初の時点では、「臆病」を恥じることに起因していなかった」とあることは、白のエゴイズムの自覚を示すかのようにも「何かの拍子に煤よりも黒い体を見ると、臆病を恥じる気が起 ころがあるのではないか。

各) ・「何處の犬! 今度は白の方が呆気にとられました。(中

何處の犬とはどうしたのです?

わたしですよ!

白で

いくらまつ黒になつてゐても、やつぱりあの白なのです「お嬢さん! 坊ちゃん! わたしはあの白なのですよ。すよ!」」

黒色への嫌悪は、

自分自身を認識してもらえないことへの嘆きゆ

されない絶望にある

ょ。

生な らえるということがありえたならば、白はこれほどまでに辛くはに、 なっていても、自分は白なのだ〉と「お嬢さん」たちに認めてもへへ えのものだった。到底不可能なことではあるが、仮に、〈黒く

なかったはずだ。

のは、自分が自分だと誰にも認識してもらえないことを再確認する往来の水たまり」、「往来の若葉を映してゐる飾り窓の硝子」なる往来の水たまり」、「往来の若葉を映してゐる飾り窓の硝子」なを指摘したが、黒くなった自分を映すものを恐れている様子が作品ど、白が黒くなった自分の姿を映すものを恐れている様子が作品と、白が黒したが、黒くなった自分を映すものを恐れている様子が作品と、白が黒したが、黒くなった自分を映すものをといる。本稿の第二章で、白が美しい自らの容姿に中には描かれている。本稿の第二章で、白が黒してもらえないことを再確認する。

殺しにした自分の「臆病」を憎んだのである。もしも、黒くなっ友を見殺しにしたことしか思い当たらなかったからこそ、その見なったのは黒くなってしまったからであり、黒くなった理由は、

ることが辛かったからではないか。そして、自分を認識されなく

を持ち、〈我が家の白〉として認められていた自分が自分と認識た身勝手な自分への嫌悪にあるというよりは、飼い犬として所属さを厭うことはなかったはずである。白の悲しみは、黒を裏切っほど「臆病」を恥じたり、「黒いわたしを殺した」くなるほど黒自己愛から黒さを嫌いはしても、死の危険をおかして強敵と戦うてもお嬢さんや坊ちゃんに愛されて暮らせたなら、白い自分へのてもお嬢さんや坊ちゃんに愛されて暮らせたなら、白い自分への

ことが窺がえる。その当然あるべき守られた場所を失った時、 勇猛な犬として振る舞うようになるのだ。しかし、白を奮い立た したが、お隣の黒君は掴まりましたぜ」と報告していた白 尾を振りながら」ご主人のもとに飛んでいき「わたしは助かりま の悲嘆と後悔が、白を以前とは違う勇敢な犬へと変えた。「尻つ はこんな目にあったのは自分の臆病のせいだと考え、そのことへ は、 声は「何とも云はれぬ悲しさと怒り」に震えた、とあることから をかわいがってくれるものと思っていた白が、「お嬢さん」や 遭うことのない守られた庭に帰ってきて、当然ご主人たちは自分 所属の場があることを当然と思っている。また、犬殺しの恐怖に はやかましいですか?」と尋ねるが、ナポレオンは帰る家という い、「おぢさんは何處に住んでゐるのです?」「おぢさんの御主人 フェの前で「得意さうに」「僕は此處に住んでゐるのです」と言 犬ばかりである。白に助けてもらった後、ナポレオンは貧しいカ 「火のやうに燃えた眼の色」で吠えかかり、 「坊ちゃん」に自分だと気付いてもらえないと気付いた時、 白もまた所属の場があることを当然のものとして捉えていた 黒も、 ナポレオンも、 作品中に登場する犬はすべて飼い 〈正義〉 のために戦う 白の Ė

る。

の意識は常に「わたし」がどうあるか、どうするかという点にあいまされる。「黒いわたしを殺したさ」ゆえだったのである。白ことであった。「義犬」として称えられるほど多くの人を救ったことであった。「義犬」として称えられるほど多くの人を救ったことであった。「義犬」として称えられるほど多くの人を救ったことであった。「義犬」として称えられるほど多くの人を救ったことであった。「義犬」として称えられるほど多くの人を救った目が抱えるエゴイズムは、ここにこそあるのではないか。黒を白が抱えるエゴイズムは、ここにこそあるのではないか。黒を

の前に愛しいご主人たちが現れた時の白は、非常に浮かない様子愛するご主人へと馳せられているように思える。しかし、いざ目お月様に語っていた。ここでは白の想いは自分自身にではなく、れたとしても「本望」だから、「ご主人の顔」を一目見たいと、白は、「野良犬と思われて」、「坊ちやん」のバットで打ち殺さ

である。

「白は小さい主人の声に、はつと目を開きました。見れば「白は小さい主人の声に、はつと目を開きました。 見ればでなった時にも、やはり今のやうに驚いたものです。あの時変つた時にも、やはり今のやうに驚いたものです。あの上へに顔を見合わせてゐます。白は一度挙げた目を又芝の上へに顔を見合わせてゐます。白は一度挙げた目を又芝の上への悲しさを考へると、——白は今では帰つて来たことを後の悲しさを考へると、——白は今では帰つて来たことを後の悲しさを考へると、——白は今では帰って来たことを後の表した。」というにはいるいきにはいる。

も、白の意識は一目会いたかったご主人に会えたという

にあるのではなく、

あくまでも、「臆病」のせいでこんな憂き目

消し去ろうとするものであり、

白の意識は、

可哀想なナポレオン

つけてもらえないような黒犬に変えた「臆病」を「わたし」から

「臆病者になるな!」という内なる声は、自分をご主人に見

にあってしまった自分自身に注がれている。

せた

の体が元の白色に戻ったことを知る。向けられている。そして「坊ちやん」の言葉によって、白は自分ことへではなく、〈自分が自分と認められない悲しさ〉にばかり

---白は唯恍惚とこの犬の姿に見入りました。」 ・「白が! 白は思はず飛び起きました。すると逃げるとで ・「白が! 白は思はず飛び起きました。すると逃げるとで ・「白が! 白は思はず飛び起きました。すると逃げるとで ・「白が! 白は思はず飛び起きました。すると逃げるとで ・「白が! 白は思はず飛び起きました。すると逃げるとで

愛へと向いていることに注目したい。

黒を見殺しにしたことが黒犬への変身の理由と勝手に思い込んだもなければ、白犬に戻ることがその克服なわけでもない。問題は、黒犬へと変身させられてしまうことがエゴイズムへの罰なので

ところにあるのではないか。戻ってからも、いつもずっと「わたし」のことしか考えていない日が、贖罪かのように見える善行を積む間も、はたまた白犬に

の中に、エゴイズムは今もずっと渦巻いているのだ。他の誰のことをも考えず、ただ自分のことばかりを考えている白他の誰のことをも考えず、ただ自分のことばかりを考えている白と捉えるに違いない。しかし、そのような白の認識とは裏腹に、ることは、〈エゴイズムの克服〉を自分が成し遂げた結果なのだを捉えるに違いない。しかし、そのような白の認識とは裏腹に、白黒犬への変身を、黒を見殺しにしたためと考えている白は、白黒犬への変身を、黒を見殺しにしたためと考えている白は、白

五、 おわりに

エゴイズムには全く気付かない。 語る。白自身と同様に、この語り手もまた、 死の奮闘の末についに白色へと戻ったことを、 という目線からこの作品を語っていた。その加害者である白が必 も確認したとおり、 そこにはやはり語りの効果が大きく関わっていよう。本稿の一で 迎えられるシーンも、 品に物憂さは一切なく、最後に「お嬢さん」「坊ちゃん」に白が を軸としながら、この作品の読解を試みてきた。しかし、この作 う点、そして白は最後までエゴイストであり続けているという点 白の変身はエゴイズムとは関係のない不条理なものであるとい 語り手は 非常に明るく屈託のないものとなっている。 〈黒は被害者であり、 白の中にあり続ける 語り手は感動的に 白は加害者)

に限った話ではない。不条理な変身をエゴイズム故のものと思い そして、反省や贖罪を試みるも、 時、 犬として評価しもてはやす人間たちは、無責任で不確かな評価し そして、最後まで白の根本的なエゴイズムには気づきもせず、 人間のエゴイズムへの強い風刺が込められているのではないか。 し」のことしか考えていないエゴイストであるということには、 許されたと思っているにもかかわらず、結局は最後まで「わた 込んで奮闘を重ねた白が、白犬に戻ったことで自分の罪がついに は他の誰でもない「わたし」のことでしかないということも、 を類推することで納得を得ようとすることは往々にしてあろう。 そのすべての出来事に必ずしも明確な因果関係があるわけではな る日突然身に降りかかることは世の中には少なからずあろうが、 か出来ない他者の象徴なのではないだろうか。 〈白=加害者〉という観点からこの作品を語る語り手や、 白が黒犬になってしまったように、予測もしなかったことがあ 不条理なことと思い切ることが出来ず、自分なりに因果関係 極めて不条理な出来事であることも少なくない。しかしその 頭の中を占めていることの根本 白を義 É

1989年12月)

- 「女性改造」」(「学苑」2012年9月) (4) 平野晶子 「女性雑誌という舞台 ――芥川龍之介「白」と
- (5) 酒井英行 「芥川龍之介の童話 (続)」(「藤女子大学国文雑誌
- 二月) 木村小夜 「芥川童話における〈因果〉再検討――「蜘蛛の糸」 木村小夜 「芥川童話における〈因果〉再検討――「蜘蛛の糸」

6

1991年3月)

(7) 今川勲『犬の現代史』(現代書館 1996年)

付記

(にしむら・まゆみ 本学博士後期課程修了)

ì

- (1) 尾崎瑞恵「芥川龍之介の童話」(「文学」1970年6月)
- の研究 1972年12月臨時増刊号」)(2) 鳥越信 「芥川龍之介における ^童心、」(「国文学 解釈と教材
- (3) 越智良二 「芥川童話の展開をめぐって」(「愛媛国文と教育